

# SAP S/4HANA Cloud Public Edition 解説

Private Cloud 経験者が知るべき構造的差異・制約・設定の真実

2026年6月

# はじめに：「同じ SAP」という先入観が最大の落とし穴

---

SAP S/4HANA Cloud Public Edition（以下、Public Edition / PE）は「SAPの最新クラウド ERP」として紹介されますが、S/4HANA Private Cloud（オンプレミスまたは専有クラウド）を長年構築してきた技術者・コンサルタントにとって、最初に直面する壁は「同じ SAPなのに、なぜこんなに違うのか」という困惑です。

本稿はその困惑を解消するために書かれています。概要説明は最小限にとどめ、「テーブル構造・カスタマイズ可否・データモデルの差異・トランザクションの制約・技術的な設定の違い」という Private Cloud 経験者が即座に実務判断に使える情報に集中して解説します。

結論を先に言えば、Public Edition は「SAP 標準プロセスを Fit-to-Standard で使うことを前提に設計された SaaS」であり、Private Cloud で当然のように行ってきた ABAP カスタマイズ・テーブル直接参照・Customizing 自由設定の大半が封印されています。この制約の境界線を正確に把握することが、Public Edition 導入成否の分岐点です。

# 1. アーキテクチャの根本的差異：マルチテナント SaaS とは何か

---

## Private Cloud と Public Edition の基盤構造の違い

Private Cloud では「一つの SAP システム（ABAP Application Server）を一社が専有」します。DB スキーマも一社専用であり、ABAP 開発・テーブル変更・Customizing 変更は自由度が高い状態です。

Public Edition は「一つの SAP システムを複数企業（テナント）が共有するマルチテナント SaaS」です。SAP 社がシステムインフラ・ABAP コア・アップグレードを一元管理しており、テナントごとのコード変更や DB 直接操作は原則不可能です。

- コードライン（Code Line）：Public Edition では全テナントが同一の ABAP コード（標準コード）を共有します。SAP が年 4 回（四半期ごと）の強制アップグレードを実施します。
- テナント分離：テナントごとにクライアント（Client）が分離されています。Private Cloud と同じ「クライアント」の概念ですが、DB 物理層は共有インフラです。
- カスタマイズの範囲：「Configuration（IMG 設定）」のうち SAP が許可した設定項目のみが変更可能です。許可されていない IMG 項目はそもそも表示されません。

## システム構成：3 システムランドスケープの強制

Private Cloud では開発（DEV）・品質保証（QAS）・本番（PRD）の 3 システム以外に、サンドボックス・トレーニングシステム等を自由に追加できます。Public Edition では以下の構成が標準として提供されます。

- Starter System（スターターシステム）：導入プロジェクト初期の Fit-to-Standard ワークショップ用。SAP 標準プロセスの確認に使用。Configuration は永続しません。
- Quality System（品質保証システム）：テスト・ユーザー受入試験（UAT）用。
- Production System（本番システム）：本稼働システム。

開発システム（DEV）が存在しないことが Private Cloud 経験者には最大の驚きです。ABAP カスタム開発の場となる「開発システム」がなく、代わりに BTP 上の ABAP Environment（ABAP クラウド）が拡張開発の場となります。Transport Request によるコード昇格（DEV→QAS→PRD）という従来の ABAP トランスポート体制は存在しません。

## 2. ABAP とカスタマイズ：何ができて何ができないか

---

### ABAP カスタマイズの全面禁止

Private Cloud の技術者が最初に知るべき最重要事実：Public Edition では SAP コア（Standard Code）への ABAP カスタマイズ（ユーザー出口・BAdI 実装・Enhancement Spot・Function Module の変更・標準テーブルへの直接書き込み）は一切不可能です。

- ユーザー出口（User Exit）：Private Cloud では多用される USER\_EXIT\_\*・EXIT\_\*形式の Exit。Public Edition では提供されていません。
- クラシック BAdI：Private Cloud で使用してきた「クラシック BAdI（SE18 のインターフェース実装）」は使用不可。一部の機能は Key User Extensibility で代替可能ですが、全対応ではありません。
- ABAP Dictionary 変更（SE11）：標準テーブルへのフィールド追加・新規テーブル作成は不可。カスタムテーブル（Z テーブルを SE11 で作成する従来方式）も不可。
- SE80（ABAP ワークベンチ）：SE80 は存在しますが、標準オブジェクトへの変更保存はエラーになります。閲覧のみ可能。

### 許可された拡張：Key User Extensibility と Developer Extensibility

Public Edition の拡張は二つの公式チャンネルに限定されます。

#### Key User Extensibility（キーユーザー拡張）

ABAP コーディングなしに、ビジネスユーザー（キーユーザー）が Fiori UI 上で設定できる拡張。

- カスタムフィールド（Custom Fields and Logic）：標準オブジェクト（販売伝票・購買発注・取引先等）への追加フィールド定義。Fiori アプリ「Custom Fields and Logic（F3484）」で定義します。追加したフィール

ドは SAP が管理する Extension Table に格納されます（標準テーブルは変更しない）。

- カスタムロジック（Business Logic）：「Custom Fields and Logic」アプリで「ビジネスロジック（BAdI）」の実装を Fiori 上の ABAP エディタで記述できます。ただし使用できる ABAP は ABAP クラウド準拠（Released API のみ）に制限されます。
- カスタム CDS ビュー（Custom CDS Views）：既存 CDS View にカスタムフィールドを Extension として追加できます。レポート・分析への活用が目的です。
- ページレイアウト変更（Page Layout）：Fiori アプリの画面レイアウト（フィールドの表示/非表示・必須化・グループ化）をノーコードで変更できます。

## Developer Extensibility (Side-by-Side 拡張)

BTP 上の ABAP Environment・CAP・Build Apps を使用した Side-by-Side 拡張。Public Edition のコアには触れず、BTP 側でカスタムアプリを開発して Public Edition API を呼び出す方式です。

- Released OData API（SAP API Business Hub）：Public Edition は SAP 標準 OData API を通じてのみ外部システムからのデータ操作を受け付けます。Released API に含まれない操作（特定の業務ロジック・特定テーブルへの直接アクセス等）は API 経由でも実行できません。
- RAP（Restful ABAP Programming Model）：BTP ABAP Environment で開発した RAP ベースのカスタムアプリが Public Edition の API を呼び出す構成。

### 3. テーブル構造とデータモデルの差異

---

#### Universal Journal (ACDOCA) : Private Cloud と共通の中核

S/4HANA の Universal Journal (テーブル ACDOCA) は Public Edition と Private Cloud で共通の中核データモデルです。FI・CO・ML (Material Ledger) のすべての仕訳データが ACDOCA の単一テーブルに格納されるアーキテクチャは Public Edition でも同一です。

ただし ACDOCA のテーブル構造に関して以下の差異があります。

- カスタム拡張フィールド: Private Cloud では「ACDOCA-ZZFIELD」のような Z フィールドを SE11 で ACDOCA に直接追加できます。Public Edition では直接追加は不可で、Extension Table (ACDOCA\_E 等の拡張テーブル) に Key User 拡張フィールドが格納されます。レポート・CDS View ではこの拡張テーブルを JOIN して参照します。
- テーブル参照の方法: Public Edition では標準テーブルへの SELECT 文による直接参照 (ABAP Open SQL) を独自 ABAP から実行することはできません。データアクセスは CDS View・Released API を通じた参照が原則です。

#### カスタムテーブルの代替: Extensibility Table の仕組み

Private Cloud では Z テーブル (SE11 で定義する任意のカスタムデータテーブル) を自由に作成できます。Public Edition ではこの方法は存在せず、カスタムデータの格納には以下の代替手段を使用します。

- Key User Custom Objects (Custom Business Objects: CBO) : Fiori アプリ「Custom Business Objects」でカスタムデータオブジェクト (テーブルに相当) をノーコードで定義します。フィールド・キー構造・関係性 (標準オブジェクトとのリンク) を定義でき、自動生成された Fiori 画面でデータ管理ができます。ただし Z テーブルほどの自由度 (JOIN の柔軟性・インデックス定義・バルクデータ処理性能) はありません。

- HANA Cloud (BTP) でのカスタムデータ管理: 大規模カスタムデータは BTP 上の HANA Cloud に CAP アプリを経由して格納し、Public Edition との連携は API で行う方法が実践的です。

## 重要テーブルの参照可否

Private Cloud で日常的に参照していた重要テーブルについて、Public Edition での参照方法の変化を整理します。

- MARA/MARC/MARD (品目マスタ) : 直接 SELECT は不可。CDS View 「I\_Material」 「I\_MaterialPlant」 「I\_MaterialStock」 等の公開 CDS View を通じて参照します。Released OData API 「API\_MATERIAL\_DOCUMENT\_SRV」 「API\_PRODUCT\_SRV」 等でのアクセスが標準。
- KNA1/KNB1 (得意先マスタ) : CDS View 「I\_Customer」 「I\_CustomerCompanyCode」 を通じて参照。OData API 「API\_BUSINESS\_PARTNER」 が標準連携 API。
- LFA1/LFB1 (仕入先マスタ) : ビジネスパートナー (BP) 統合モデルに一本化。CDS View 「I\_Supplier」 「I\_SupplierCompanyCode」 を使用。
- VBAK/VBAP (受注ヘッダ/明細) : CDS View 「I\_SalesOrder」 「I\_SalesOrderItem」 を使用。OData API 「API\_SALES\_ORDER\_SRV」 で CRUD 操作。
- EKKO/EKPO (購買発注ヘッダ/明細) : CDS View 「I\_PurchaseOrder」 「I\_PurchaseOrderItem」 を使用。OData API 「API\_PURCHASEORDER\_PROCESS\_SRV」 。
- BSEG (FI 明細テーブル) : S/4HANA では BSEG は互換ビューとして残存。Public Edition でも参照可能ですが、パフォーマンス上は ACDOCA を CDS View 経由で参照することが推奨されます。
- T001/T001L (会社コード/保管場所) : これらの設定テーブルは Customizing 設定として参照可能。ただし ZABAP からの SELECT は不可。

## 4. Customizing の差異：IMG で何が設定できて何ができないか

---

### Customizing へのアクセス方法の変化

Private Cloud では SPRO（IMG：Implementation Guide）から全 Customizing 設定に自由にアクセスできます。Public Edition では SPRO は存在しますが、表示される Customizing 項目が SAP によって厳選された「許可済み設定（Allowed Customizing）」のみに制限されています。

許可されていない IMG 項目はそもそも SPRO のツリーに表示されません。「あの設定項目がない」という体験が Private Cloud 経験者に頻繁に生じます。

### 設定可能な Customizing と不可の Customizing（主要領域別）

#### FI（財務会計）

- 設定可能：会社コード定義・会計年度バリエーション・転記期間バリエーション・勘定科目コード表（勘定科目の追加・変更）・支払条件・Dunning（督促）設定・税コード定義（限定的）・銀行マスタ基本設定。
- 設定不可/制限あり：会計仕訳タイプ（Document Type）の新規作成（標準タイプのみ使用・カスタムタイプ追加は不可）・カスタム転記キー（Posting Key）の追加・Financial Closing Cockpit（FCC）の詳細カスタマイズ・カスタム割り当てルール（Account Determination）の高度な変更。

#### SD（販売管理）

- 設定可能：販売組織・流通チャネル・製品階層の基本定義・受注タイプ（Order Type）は標準タイプの設定変更（一部）・出荷タイプの基本設定・請求タイプの基本設定・価格手続き（Pricing Procedure）のカスタム追加・条件タイプの追加（一定範囲内）。
- 設定不可/制限あり：新規受注タイプ（Sales Document Type）の自由な追加（SAP 標準タイプ以外は原則不可）・カスタム出荷スプリットルール・出力管

理 (Output Management) のアクション設定は新方式 (BRF+/Form Template) に移行・Availability Check 設定の詳細変更。

## MM (購買・在庫管理)

- 設定可能: 購買組織・購買グループ・資材タイプ (Material Type) の一部設定変更・移動タイプ (Movement Type) の基本設定・仕入先評価基準 (一部) ・評価クラス (Valuation Class) の追加 (限定的) ・MRP タイプの基本設定。
- 設定不可/制限あり: カスタム移動タイプ (Zxxx 形式の新規 Movement Type) の追加は不可・ユーザー定義の在庫タイプ追加・MRP 計算のカスタムアルゴリズム・購買情報レコード自動更新ルールの詳細変更。

## PP (生産計画)

- 設定可能: プラント定義・作業スケジューリングのパラメータ・MRP パラメータ (再発注点・ロットサイズ) ・ワークセンタカテゴリの基本設定・生産バージョンの設定。
- 設定不可/制限あり: カスタム生産指図タイプの自由な追加・Shop Floor Control のカスタムステータス追加・カスタム MRP 計算ルーティンの組み込みは不可。

## CO (管理会計)

- 設定可能: 原価センタ階層・利益センタ階層・内部指図タイプ (一部標準) ・原価要素 (Primary/Secondary Cost Elements) ・活動タイプ定義・WBS エlement 設定 (PS) 。
- 設定不可/制限あり: カスタム原価計算バリエーション (Costing Variant) の詳細カスタマイズ・カスタム勘定決定 (Account Determination) の変更・CO-PA 特性の自由な追加 (一定の上限と承認プロセスが必要) 。

## Configuration の変更手順: Fiori 「Manage Your Solution」

Public Edition の Customizing 設定の主要インターフェースは「Manage Your Solution (F2700)」Fiori アプリです。Private Cloud の SPRO に対応しますが、表示される設定項目は Public Edition 用に絞り込まれています。

- 設定変更の手順: 「Manage Your Solution」 → 「Configure Your Solution」 → 業務領域を選択 → Activity (設定項目) を選択 → 設定画面を開いて変更。
- 変更の反映: Public Edition の Customizing 変更は 「Change Request (変更依頼)」 を通じて本番システムに反映します。Private Cloud のトランスポートに相当しますが、SAP が変更の整合性を自動チェックした上で反映されます。
- バックグラウンド設定 (Background Job Scheduling) : バックグラウンドジョブ (SM36 相当) は 「Manage Scheduled Jobs (F2373)」 Fiori アプリで管理します。SM36 での直接ジョブ定義は不可。SAP 標準のジョブテンプレートに基づいてスケジュールを設定します。

## 5. トランザクションコードと Fiori: 画面操作の変化

---

### SAP GUI トランザクションの利用可否

Public Edition では業務処理の主要インターフェースは Fiori に移行しています。SAP GUI は完全に廃止されたわけではありませんが、利用できるトランザクションコードが大幅に制限されています。

#### 引き続き使用できる主要トランザクション (一部)

- SE16N/SE16 (テーブルブラウザ) : 公開された範囲のテーブル・CDS View の参照のみ。更新は不可。Z テーブルは存在しないため対象は標準テーブル・CDS View。
- AL11 (ファイルシステム参照) : BTP のインフラ上ではファイルシステムへのアクセスは制限されます。ファイル連携は SFTP/API 経由が原則。
- SU01 (ユーザー管理) : ユーザー作成・権限ロールの割り当ては可能。ただし認証は IAS (Identity Authentication Service) との連携が標準で、SU01 だけでは完結しない場合があります。
- SM30 (テーブルメンテナンス) : 許可された Customizing テーブルのみ変更可能。Z テーブルは存在しないためその用途では使用不可。

#### 使用不可または機能制限の主要トランザクション

- SE11 (ABAP Dictionary) : 標準テーブルの参照は可能。変更・新規作成は不可。
- SE80 (ABAP ワークベンチ) ・ SE38 (ABAP エディタ) : 標準プログラムの閲覧のみ。変更・カスタムプログラム作成は不可。
- SPRO (全体 IMG) : Public Edition 用に絞り込まれた IMG のみ表示。
- SM36/SM37 (バックグラウンドジョブ管理) : 直接のジョブ定義は不可。Fiori 「Manage Scheduled Jobs」を使用。
- ST05 (SQL トレース) ・ ST12 (ABAP Trace) : パフォーマンス分析ツール。Public Edition では標準ユーザーへのアクセスは制限されており、SAP 支援チームが使用する管理者ツールの位置付け。

- CMOD (拡張管理) ・ SE19 (BAdI Builder) : カスタム実装のための BAdI 管理。Public Edition では使用不可 (Key User Extensibility に置き換え)。

## **Fiori Launchpad のカスタマイズ制約**

Private Cloud の Fiori Launchpad ではタイルのグループやカタログを SAP\_UI\_BC\_MC (Fiori Launchpad Content Manager) 等で自由にカスタマイズできます。Public Edition では「Manage Launchpad Settings (Fiori)」でのカスタマイズが可能ですが、タイルのソースとなるビジネスカタログ (Business Catalog) の定義は SAP 標準のみであり、カスタムビジネスカタログの追加は制限されています。カスタム Fiori アプリのタイル追加は BTP 上の「SAP Build Work Zone」経由で行います。

## 6. 権限管理の差異

---

### 役割ベースアクセス制御：ビジネスロール中心への変化

Private Cloud では PFCG（プロファイルジェネレーター）でシングルロール・複合ロール・プロファイルを細かく定義します。Public Edition では権限管理は「ビジネスロール（Business Role）」を中心とした方式に変化します。

- ビジネスロール：SAP 標準の業務役割（例：「Accounts Payable Accountant」「Warehouse Operator」）として定義されています。各ビジネスロールはビジネスカタログ（Business Catalog: Fiori アプリのセット）とアクセス制限（Restriction Type: 組織値のフィルタ）の組み合わせで構成されます。
- ビジネスロールのカスタマイズ：SAP 標準ビジネスロールをコピーしてカスタムビジネスロールを作成できます。ビジネスカタログの追加・削除・Restriction Type の値（会社コード・プラント・販売組織等）の設定が可能。
- PFCG 廃止ではない：PFCG 自体は存在しますが、Public Edition では PFCG で直接ロールを作成してユーザーに割り当てる従来方式は推奨されません。ビジネスロール管理は Fiori アプリ「Maintain Business Roles (F2700 系)」が標準です。

### 認証と IAS の強制統合

Public Edition では認証基盤として「SAP Identity Authentication Service (IAS)」との統合が前提です。Private Cloud ではローカル認証（SU01 のパスワード管理）が主流でしたが、Public Edition では全ユーザーの ID・認証を IAS で管理し、SSO を実現します。

- Active Directory (Azure AD / Entra ID) 連携：企業の IdP と IAS を SAML Federation で連携し、企業の AD アカウントで Public Edition にシングルサインオンします。
- ローカルユーザー（SU01）の制限：テクニカルユーザー（バックグラウンドジョブ用・API 連携用）は引き続き SU01 で管理しますが、一般業務ユーザーの SU01 ローカル管理は非推奨です。

## 7. 出力管理（Output Management）の変化

---

### 従来の NACHRICHTEN 方式からの脱却

Private Cloud では NACHTEN（メッセージ）と呼ばれる出力管理フレームワーク（NAST・条件テーブルベース）で伝票印刷・EDI・メール送信を管理していました。Public Edition ではこの方式は「レガシー出力管理」として位置付けられ、新方式への移行が必要です。

### 新方式：BRF+と Form Template ベース

- Business Rules Framework +（BRF+）：出力チャンネル（印刷・EDI・メール・電子署名等）の決定ルールを BRF+ で定義します。Private Cloud の条件テーブル（NAST）に相当しますが、UI が Fiori 化されより柔軟な条件定義が可能。
- Form Templates（Adobe Forms / SAP Forms）：印刷帳票は Adobe Document Services（ADS）上の Adobe Forms で定義します。Private Cloud の SAPscript や SmartForms は非推奨。既存 SAPscript/SmartForms から Adobe Forms への移行が必要です。
- 「Maintain Output Channels」：Fiori アプリ「Maintain Output Channels（F2679）」で出力チャンネルの設定を管理します。

出力管理の変更はプロジェクト工数として過小評価されがちです。既存の帳票（請求書・注文書・出荷指示書等）が SAPscript/SmartForms で作成されている場合、Adobe Forms への全面移行設計が必要であり、大規模な帳票カスタマイズを行っていた企業ほど影響が大きくなります。

## 8. インターフェースと連携の差異

---

### IDOC の位置付けの変化

Private Cloud では IDoc (Intermediate Document) が「レガシーシステム・他 SAP・EDI」との標準連携手段として広く使用されてきました。Public Edition でも技術的には IDoc を使用できますが、新規設計では「OData API / REST API 経由の統合 (SAP Integration Suite)」が推奨されます。

- IDoc から新方式への移行推奨: 既存の IDoc 連携を OData API + BTP Integration Suite (iFlow) に移行することを計画します。IDOC のサポートが終了するわけではありませんが、新機能・拡張は API 方式に集中するためです。
- RFC (Remote Function Call) : 外部システムからの RFC 呼び出しは原則不可。RFC 代替として Released OData API・BAPI ラッパー API (一部) を使用します。

### BTP Integration Suite (iFlow) の必須化

Public Edition と外部システムのすべての連携は「BTP Integration Suite (Cloud Integration) の iFlow」を経由することが SAP 推奨アーキテクチャです。直接 DB 接続・直接 RFC 接続は封鎖されているため、API ベース統合がデフォルトです。

Private Cloud で多用されていた「カスタム ABAP プログラムによるバッチファイル連携 (FTP→ABAP 処理→DB 書き込み)」パターンは、Public Edition では「SFTP サーバー→iFlow (ファイル取得・変換) →OData API (Public Edition へのデータ投入)」パターンに置き換わります。

### Print Output の変化: クラウド印刷管理

Private Cloud では印刷は SAPspool システムと SAP Print Server (CUPS 等) で管理します。Public Edition では「Cloud Print Manager (Fiori)」または外部クラウド印刷サービス (SAP Document Management Service・Open Text

等)との連携が必要です。社内プリンターへの直接印刷設定は Public Edition では追加設定が必要です。

## 9. 四半期強制アップグレードの実務的影響

---

### アップグレードサイクルと変更管理

Public Edition の最大の運用特性は「年 4 回の強制アップグレード (Quarterly Release)」です。SAP が自動的に全テナントのシステムを新バージョンに更新します。これは Private Cloud の「数年に一度の計画的なバージョンアップ」とは根本的に異なる運用要件です。

- プレビューシステム (Preview System) : 本番アップグレードの約 3 週間前に、同じ変更が品質保証システムに先行適用されます (Preview Period) 。この期間に変更の影響確認・リグレッションテストを実施します。
- 変更内容の通知: SAP は「What's New Viewer」 (help.sap.com) で各四半期リリースの変更内容 (新機能・廃止機能・Customizing 変更) を事前公開します。運用チームはこの通知を定期的に確認してアップグレードへの対応を計画する体制が必要です。
- テスト自動化の必須性: 四半期ごとにリグレッションテストを実施するには、手動テストだけでは工数が不足します。SAP Cloud ALM (Test Suites 機能) または外部テスト自動化ツール (Tricentis tosca・Worksoft 等) によるテスト自動化が実質的に必須です。

### 廃止機能への対応

四半期リリースでは新機能追加と同時に「廃止予告 (Deprecated) 機能」が通知されます。廃止機能には「廃止予告期間 (通常 2 年程度)」が設けられますが、廃止日以降は機能が無効化されます。

Private Cloud 経験者が特に注意すべき廃止機能の例として、SAPscript/SmartForms・クラシック BAdI・NACHTEN ベースの出力管理等があります。これらは既に Deprecated ステータスとなっており、Public Edition 導入時には新方式への移行設計が必須です。

# 10. SAP Cloud ALM: Private Cloud ALM との違い

---

## Cloud ALM の位置付け

SAP Cloud ALM (Application Lifecycle Management) は Public Edition の実装・運用管理ツールです。Private Cloud で使用する SAP Solution Manager (SolMan) とは別製品で、BTP サービスとして提供されます。

- 実装管理 (Implementation) : プロジェクト・フェーズ・タスク・フィットギャップ分析・テストケース管理を Cloud ALM で実施します。
- 変更管理 (Change Management) : Customizing 変更の品質保証システムから本番への反映を Cloud ALM の「Change and Transport Management」で管理します。
- 運用管理 (Operations) : システムモニタリング・ジョブモニタリング・アラート管理を Cloud ALM で実施します。Private Cloud の SolMan Monitoring 相当。
- テスト管理 (Test Suites) : リグレッションテスト・UAT のテストケース管理・実行・結果記録を Cloud ALM で管理します。

SolMan から Cloud ALM への変化は管理ツールの移行だけでなく、プロセスと考え方の変化を伴います。SolMan のカスタム設定・カスタム Monitoring 設定は Cloud ALM に持ち越せません。

# 11. Private Cloud からの移行設計で見落としがちなポイント

---

## 移行前チェックリスト：10の確認事項

- ①ABAP カスタマイズ棚卸：現行システムの全 ABAP カスタマイズ（ユーザー出口・BAdI・ABAP Report・Z テーブル）を一覧化し、Public Edition での代替手段（Key User 拡張・BTP 拡張・廃止・業務変更）を判定します。
- ②帳票棚卸：全 SAPscript/SmartForms をリストアップし、Adobe Forms 移行スコープと工数を見積もります。帳票数が多い企業では最大工数項目になります。
- ③IDoc・RFC 棚卸：全 IF（インターフェース）一覧を作成し、OData API + iFlow への移行設計を策定します。
- ④出力管理の NAST 依存確認：NACHRICHTENSTEUERUNG（条件テーブルベース）の出力設定がどれだけあるかを確認し、BRF+方式への移行計画を立てます。
- ⑤Customizing ギャップ分析：現行の Customizing 設定のうち Public Edition で設定不可の項目を特定し、業務プロセス変更または代替策を検討します。
- ⑥ユーザー数・ライセンス：Public Edition はユーザー数ベースのライセンス（Named User）です。Private Cloud と異なり Concurrent User ではないためアクティブユーザー数の正確な見積もりが必要。
- ⑦テスト戦略：四半期アップグレード対応のテスト自動化戦略を初期設計から計画します。
- ⑧組織設計値（会社コード・プラント等）の引き継ぎ：既存の組織設計値を Public Edition にセットアップする「マイグレーションワークシート（Migration Templates）」が提供されています。
- ⑨バックグラウンドジョブの移行：SM36 のジョブ定義を Fiori 「Manage Scheduled Jobs」に移行します。カスタム ABAP ジョブは移行できないため BTP Process Automation 等への代替が必要。

- ⑩データ移行ツール：Public Edition のデータマイグレーションは SAP 標準の「Data Migration Cockpit (LTMC / LTMOM) 」または「Data Migration to SAP S/4HANA Cloud」 ツールを使用します。ただし対応するマイグレーションオブジェクトは Private Cloud 版 Data Migration Cockpit より少ない場合があります。対象データ・移行方法の検討が早期に必要です。

以上